

高校生がネットを介した仲間内攻撃行動を傍観する理由の検討

堀内由樹子¹・樫淵めぐみ²・熊崎あゆち¹・鈴木佳苗²・八巻龍² (お茶の水女子大学¹・筑波大学²)

キーワード：高校生 ネットを介した攻撃行動 傍観理由

問題

近年、携帯やネットの普及率の増加とともに、「ネットいじめ」など、ネットを介して同じ学校の仲間から攻撃を受けるようなトラブルに注目が集まっている。こうしたネットを介した攻撃行動では、情報の公開性や情報伝達の迅速さといったネットの特性により予想外に事態が深刻化する場合もあり、トラブルに気づいた周囲の人が早期に事態の解決に向けた行動を起こすことでこうした危険性を減らすことができると考えられる。しかし、トラブルに気づいたとしても事態を静観し、特に何もしない「傍観者」となってしまう場合もある。そこで、本研究では、人々が傍観する理由を検討し、どのような理由付けで傍観を選択しているのか、明らかにすることとした。

方法

本調査は2012年3月にweb調査により実施した。『ネットでの悪口の書き込み』など、比較的生起頻度の高い5種類のネットを介した仲間内攻撃行動に遭遇したことがある高校生を、攻撃行動1種類につき100名ずつ抽出した。この500名から加害者と被害者以外で、かつ、「何か行動したか」という質問に「いいえ」で回答した、110名を分析対象とした(悪口書き込み:25名、悪口メール:19名、陰口メール:25名、個人情報暴露:24名、仲間外し勧誘書き込み:17名)。調査対象者には、大坪(1998)の項目を元にした13項目と追加作成した4項目の計17項目からなる傍観理由項目について理由として当てはまる程度を尋ね、「1:全く当てはまらない」、「2:少し当てはまる」、「3:かなり当てはまる」、「4:非常に当てはまる」の4件法で回答してもらった。

結果と考察

結果を表1に示した。傍観した理由として17項目全てが当てはまらない人は17人(15.5%)であった。当てはまる理由として、「そのような行動をされた人とあまり親しくなかったから」、「何もしなくてもそのうちおさまると思ったから」、「そのような行動をされた人に助けを求められなかったから」といった、被害者に対する親しみの低さや事態の深刻さの過小評価があげら

れていた。こうした理由によって、援助の必要性や社会的義務を否定することで、傍観しやすくなっているものと思われる。しかし、ネットの性質上、ネット上の攻撃行動に対して早期に対処せず、そのまま傍観することはより大きな被害をもたらすことにつながるため、事態をより深刻に捉えることや早期解決することの必要性を生徒たちがより強く認識するように、教師や保護者が働きかけていくこと必要であろう。

表1 傍観理由の平均値と標準偏差

| | 平均 | SD |
|--------------------------------------|------|------|
| そのような行動をされた人とあまり親しくなかったから | 2.28 | 1.11 |
| 何もしなくてもそのうちおさまると思ったから | 2.17 | 1.05 |
| そのような行動をされた人に助けを求められなかったから | 2.05 | 1.08 |
| そのような行動をされた人を、どうやって助けていいかわからなかったから | 1.93 | 1.04 |
| そのような行動をされた人にもよくないところがあったから | 1.90 | 0.97 |
| 目立ちたくなかったから | 1.87 | 1.12 |
| そのような行動をされた人のことが苦手だったから | 1.68 | 0.97 |
| そのような行動をされた人が、自分自身で何とかすべきだと思ったから | 1.63 | 0.81 |
| 助けるのがめんどうだったから | 1.61 | 0.84 |
| 助ける、自分もそのような行動をされると思ったから | 1.58 | 0.93 |
| 自分自身の問題をかかえている時期で、それに関わる余裕がなかったから | 1.48 | 0.81 |
| そのような行動をされた人が、それほどいやがっているように思えなかったから | 1.45 | 0.87 |
| そのような行動をしている人との関係を壊したくなかったから | 1.42 | 0.75 |
| 助けたら、そのような行動をされた人がもっとひどい目に合うと思ったから | 1.37 | 0.68 |
| そのような行動を見るのがおもしろかったから | 1.18 | 0.41 |
| そのような行動を止めようとして、以前に失敗したことがあったから | 1.15 | 0.54 |
| そのような行動をされた人が助けを拒否していたから | 1.09 | 0.44 |

引用文献

大坪 治彦 (1998) いじめ傍観者の援助抑制要因の検討。鹿兒島大学教育学部研究紀要 教育科学編 (50), 245-256.

註) 本研究は最先端・次世代研究開発支援プログラム「ネットいじめ研究の新展開—「行動する傍観者」を生み出すプログラム—」(代表:鈴木佳苗)の助成を受けている。